陳舜臣さんを語る会通信

NO.111　Apr.　2024

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2024年4月1日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

国立国会図書館並びに古本で、短編集未収録27作を確認

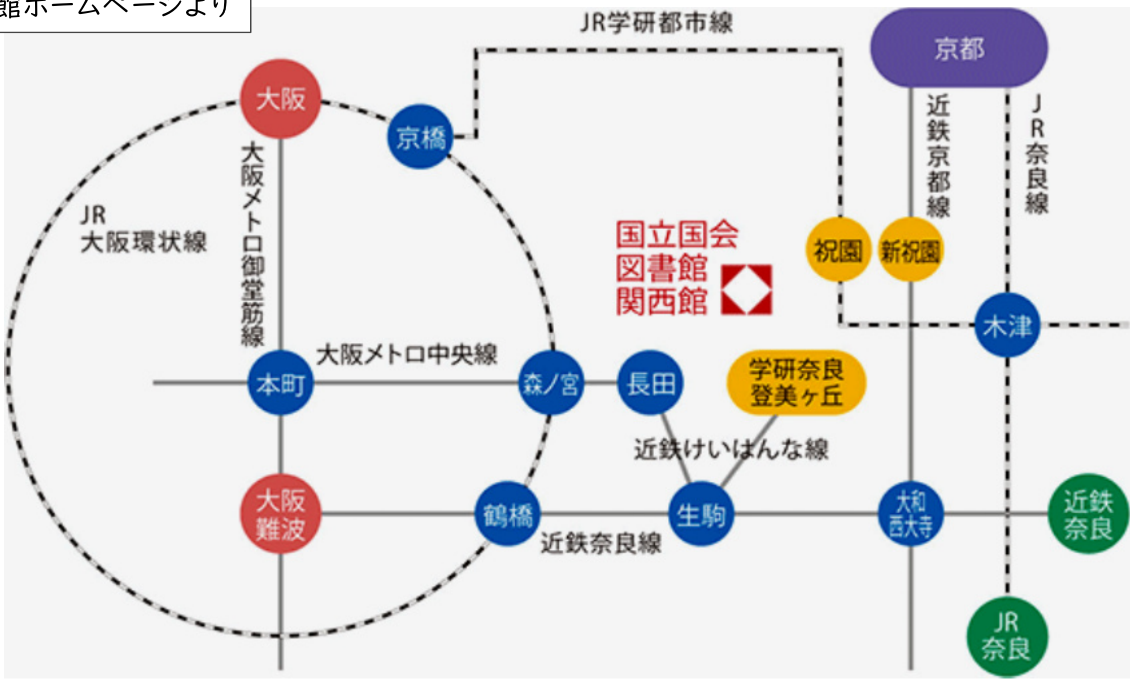
「陳舜臣さんを語る会通信」No. 89にあげた中短編143作はすべて、中短編集に収録されたものです。

中短編は通常、単独で、週刊誌や月刊誌などいろんな雑誌に発表されたあと、中短編集に収録されて単行本化されます。しかし、そうならなかった作品も相当数あるようです。それを拾い集めることは至難ですが、陳舜臣年譜(『陳舜臣中国ライブ ラリー30』)からピックアップすると、20～30編になります。

今回、これらを、国立国会図書館の蔵書を利用し、できるだけ多く集めようと思い立ちました。まず手始めに、３月の暖かい日、同図書館の関西館を訪問しました。８時前にJR明石を出発、三宮で阪神電車の近鉄奈良行快速急行に、更に近鉄奈良線の生駒で近鉄けいはんな線に乗り換え学研奈良登美ヶ丘で下車、最後はバスを利用、同館の受付に立ったのは丁度、10時でした。同館に、ほぼ４時間居て、この日の収穫は、短編小説と思っていたのがエッセーだったりして、５編に過ぎませんでした。しかし要領が分かり、東京本館に遠隔複写を依頼するときの役に立ちましたし、面白い体験・日帰り旅行でした。（編集委員　橘雄三）

国立国会図書館 関西館

同館ホームページより


JR学研都市線
京都
大阪
京橋
近鉄京都線
JR奈良線
JR
大阪環状線
大阪メトロ御堂筋線
国立国会
図書館
関西館
祝園
新祝園
木津
大阪メトロ中央線
本町
森ノ宮
長田
学研奈良
登美ヶ丘
近鉄けいはんな線
大阪
難波
鶴橋
生駒
大和
西大寺
近鉄
奈良
近鉄奈良線
JR
奈良

https://www.nihonsekkei.co.jp/projects/10938

所在地は京都府相楽郡精華町精華台。奈良とばかり思っていたら京都だったのでビックリ。

左の写真、左手の道路のバス停「国立国会図書館」で下車。
建物の写真、左へ出っ張ったトンネルのような廊下が入口。ここから入って、階段を下り、地下一階が受付。
閲覧室も地下一階。

国立国会図書館並びに古本で、短編集未収録27作を確認（一覧）

番号	題	初出誌	初出年	初出月など	掲載ページ	備考
1	潜伏者	新週刊	1962	3月22日号	64-68	データベース
2	午前11時30分	推理ストーリー	1962	7月号	64-76	東京遠隔複写
3	千客万来	週刊大衆	1962	8月4日号	78-85	東京遠隔複写
4	火の周辺	宝石	1963	2月号	32-49	東京遠隔複写
5	アルプスの密室	漫画読本	1963	3月号	232-237	東京遠隔複写
6	宿縁	宝石	1963	5月号	34-51	古本
7	怪物も死ぬ	世代'63	1963	(9月)	342-352	関西館
8	社長はおびえた	宝石	1964	3月号	48-67	古本
9	新・黄色い部屋	漫画読本	1965	1月号	226-233	古本
	新・黄色い部屋■解決編	漫画読本	1965	新春特別号	243	東京本館
10	三つ巴の殺意	推理ストーリー	1965	2月号	155-187	東京遠隔複写
11	一人の城	小説現代	1965	3月号	95-107	東京遠隔複写
12	おれは誰だ	漫画読本	1965	9月号	226-233	東京遠隔複写
13	狂った手鉤	推理ストーリー	1967	2月号	74-94	古本
14	三つのアリバイ	漫画読本	1967	3月号	228-235	東京遠隔複写
15	柔道指南の報酬	旅	1967	5月号	249-257	東京本館
16	疾走する青春	週刊読売	1968	5月10日号	102-111	関西館
17	第三の告白	小説エース	1968	11月号	92-111	東京遠隔複写
18	美貌の波紋	小説現代	1969	4月号	148-160	東京遠隔複写
19	浮いた手紙	小説サンデー毎日	1970	6月号	244-264	東京遠隔複写
20	居候坊主	週刊言論	1971	1月22日号、 29日号	118-123 120-124	東京遠隔複写
21	死んでいる	別冊小説宝石	1971	新春特大号	70-79	東京遠隔複写
22	ありえない関係	オール讀物	1971	4月号	328-345	関西館
23	キレモノ・ニセモノ	別冊小説宝石	1971	初夏号・6月	71-86	東京遠隔複写
24	破局は穴の中	小説現代	1972	10月号	128-147	東京遠隔複写
25	長い話	オール讀物	1973	11月号	368-385	関西館
26	背負って走れ	カッパまがじん（推理小説代表作選集1977）	1976	9月初秋号	169-187	古本
27	あかつきの霞	週刊小説	1976	12月6日号	8-21	関西館

上の表、いくつかの補足

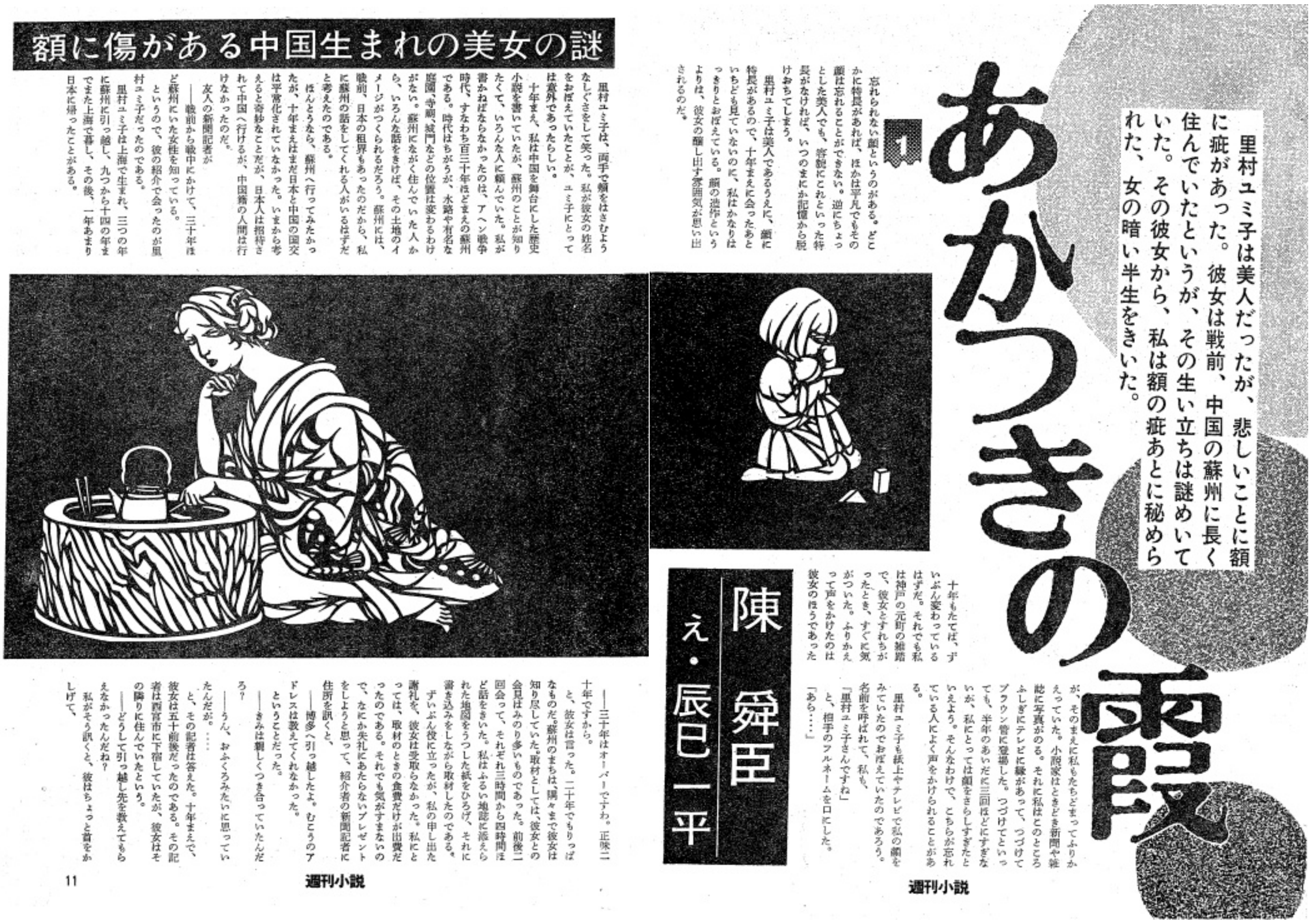
［備考欄］
- ・データベース/自宅パソコンにてプリントアウト
- ・東京本館/訪問し印刷
- ・東京遠隔複写/東京本館へ遠隔複写依頼
- ・関西館/訪問し印刷
- ・古本/古本屋にて掲載誌を購入

［初出誌欄］
- ・通し番号26/初出誌は「カッパまがじん」ですが、「推理小説代表作選集1977」を購入。掲載ページもこれに拠ります。

［国会図書館東京本館訪問］
四月中旬、機会を得て訪問。

国立国会図書館東京本館
国立国会図書館ホームページより

誌面紹介（1）



あかつきの霞

1

陳舜臣

え・辰巳一平

里村ユミ子は美人だったが、悲しいことに額に疵があった。彼女は戦前、中国の蘇州に長く住んでいたというが、その生い立ちは謎めいていた。その彼女から、私は額の疵あとに秘められた、女の暗い半生をきいた。

忘れられない顔というのがある。どこかに特長があれば、ほかは平凡でもその顔は忘れることができない。逆にちょっとした美人でも、容貌にこれといった特長がなければ、いつのまにか記憶から脱けおちてしまう。

里村ユミ子は美人であるうえに、顔に特長があるので、十年まえに会ったあといちども見ていないのに、私はかなりはっきりとおぼえている。顔の造作というよりは、彼女の醸し出す雰囲気が思い出されるのだ。

十年もたてば、ずいぶん変わっているはずだ。それでも私は神戸の元町の雑踏で、彼女とすれちがったとき、すぐに気がついた。ふりかえって声をかけたのは彼女のほうであったが、そのまえに私もたちどまってふりかえっていた。小説家はときどき新聞や雑誌に写真がのる。それに私はこのところふしぎにテレビに縁があって、つづけてブラウン管に登場した。つづけてといっても、半年のあいだに三回ほどにすぎないが、私にとっては顔をさらしすぎたといえよう。そんなわけで、こちらが忘れている人によく声をかけられることがある。

里村ユミ子も紙上やテレビで私の顔をみていたのでおぼえていたのであろう。名前を呼ばれて、私も、

「里村ユミ子さんですね」

と、相手のフルネームを口にした。

「あら……」

額に傷がある中国生まれの美女の謎

里村ユミ子は、両手で頬をはさむようなしぐさをして笑った。私が彼女の姓名をおぼえていたことが、ユミ子にとっては意外であったらしい。

十年まえ、私は中国を舞台にした歴史小説を書いていたが、蘇州のことが知りたくて、いろんな人に頼んでいた。私が書かねばならなかったのは、アヘン戦争時代、すなわち百三十年ほどまえの蘇州である。時代はちがうが、水路や有名な庭園、寺廟、城門などの位置は変わるわけがない。蘇州にながく住んでいた人から、いろんな話をきけば、その土地のイメージがつくられるだろう。蘇州には、戦前、日本の租界もあったのだから、私に蘇州の話をしてくれる人がいるはずだと考えたのである。

ほんとうなら、蘇州へ行ってみたかったが、十年まえはまだ日本と中国の国交は平常化されていなかった。いまから考えると奇妙なことだが、日本人は招待されて中国へ行けるが、中国籍の人間は行けなかったのだ。

友人の新聞記者が

――戦前から戦中にかけて、三十年ほど蘇州にいた女性を知っている。

というので、彼の紹介で会ったのが里村ユミ子だったのである。

里村ユミ子は上海で生まれ、三つの年に蘇州に引っ越し、九つから十四の年まで上海で暮し、その後、一年あまり日本に帰ったことがある。

――三十年はオーバーですわ。正味二十年ですから。

と、彼女は言った。二十年でもりっぱなものだ。蘇州のまちは、隅々まで彼女は知り尽していた。取材としては、彼女との会見はみのり多いものであった。前後二回会って、それぞれ三時間から四時間ほど話をきいた。私はふるい地誌に添えられた地図をうつした紙をひろげ、それに書き込みをしながら取材したのである。

ずいぶん役に立ったが、私の申し出た謝礼を、彼女は受取らなかった。私にとっては、取材のときの食費だけが出費だったのである。それでも気がすまないので、なにか失礼にあたらないプレゼントをしようと思って、紹介者の新聞記者に住所を訊くと、

――博多へ引っ越したよ。むこうのアドレスは教えてくれなかった。

ということだった。

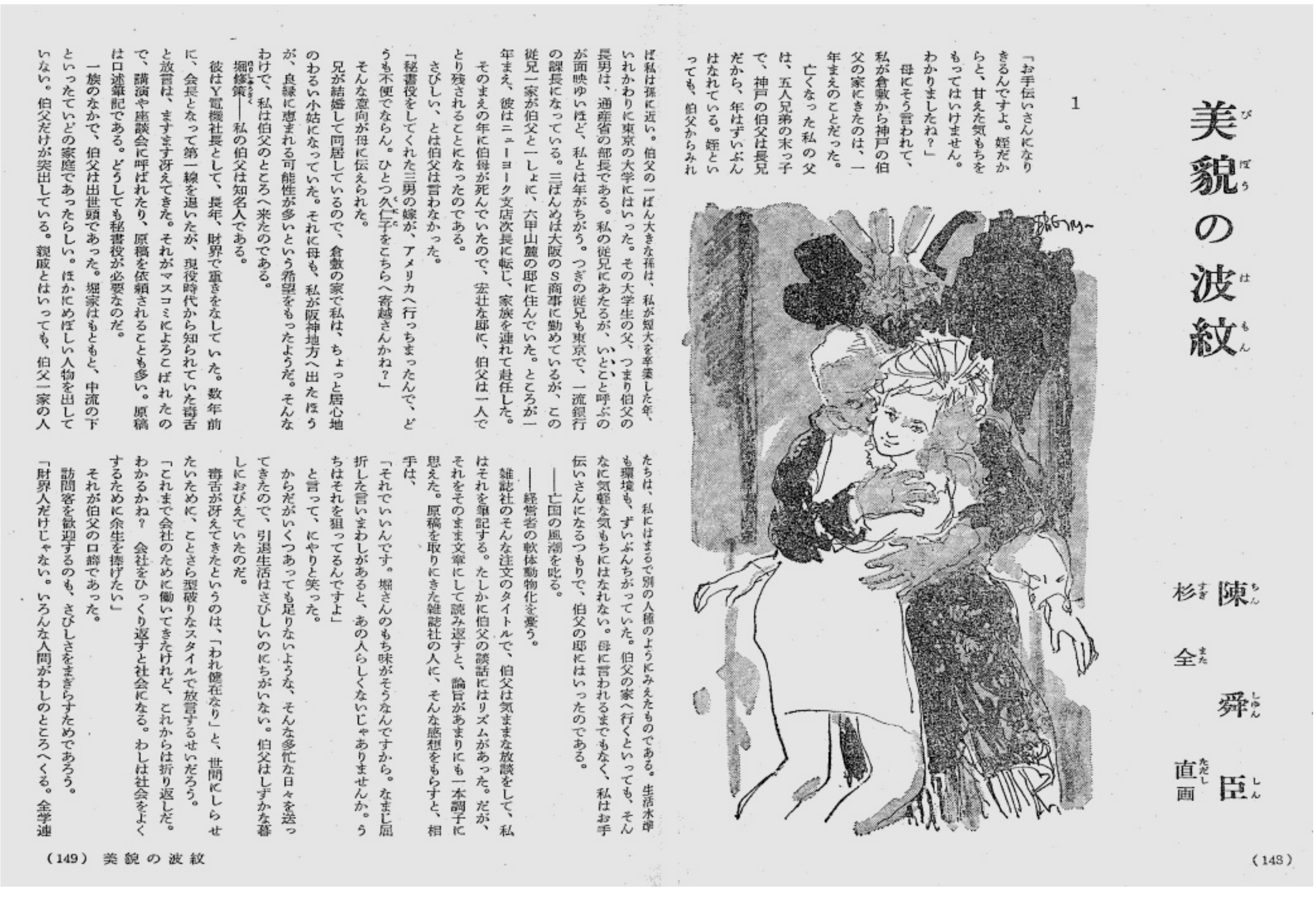
――きみは親しくつき合っていたんだろ？

――うん、おふくろみたいに思っていたんだが。……

と、その記者は答えた。十年まえで、彼女は五十前後だったのである。その記者は西宮市に下宿していたが、彼女はその隣りに住んでいたという。

――どうして引っ越し先を教えてもらえなかったんだね？

私がそう訊くと、彼はちょっと首をかしげて、



美貌の波紋

陳舜臣

杉全直画

1

「お手伝いさんになりきるんですよ。姪だからと、甘えた気もちをもってはいけません。わかりましたね？」

母にそう言われて、私が倉敷から神戸の伯父の家にきたのは、一年まえのことだった。

亡くなった私の父は、五人兄弟の末っ子で、神戸の伯父は長兄だから、年はずいぶんはなれている。姪といっても、伯父からみれば私は孫に近い。伯父の一ばん大きな孫は、私が短大を卒業した年、いれかわりに東京の大学にはいった。その大学生の父、つまり伯父の長男は、通産省の部長である。私の従兄にあたるが、いいとこと呼ぶのが面映ゆいほど、私とは年がちがう。つぎの従兄も東京で、一流銀行の課長になっている。三ばんめは大阪のS商事に勤めているが、この従兄一家が伯父と一しょに、六甲山麓の邸に住んでいた。ところが一年まえ、彼はニューヨーク支店次長に転じ、家族を連れて赴任した。

そのまえの年に伯母が死んでいたので、宏壮な邸に、伯父は一人でとり残されることになったのである。

さびしい、とは伯父は言わなかった。

「秘書役をしてくれた三男の嫁が、アメリカへ行っちまったんで、どうも不便でならん。ひとつ久仁子をこちらへ寄越さんかね？」

そんな意向が母に伝えられた。

兄が結婚して同居しているので、倉敷の家で私は、ちょっと居心地のわるい小姑になっていた。それに母も、私が阪神地方へ出たほうが、良縁に恵まれる可能性が多いという希望をもったようだ。そんなわけで、私は伯父のところへ来たのである。

堀修策――私の伯父は知名人である。

彼はY電機社長として、長年、財界で重きをなしていた。数年前に、会長となって第一線を退いたが、現役時代から知られていた毒舌と放言は、ますます冴えてきた。それがマスコミによろこばれたので、講演や座談会に呼ばれたり、原稿を依頼されることも多い。原稿は口述筆記である。どうしても秘書役が必要なのだ。

一族のなかで、伯父は出世頭であった。堀家はもともと、中流の下といったていどの家庭であったらしい。ほかにめぼしい人物を出していない。伯父だけが突出している。親戚とはいっても、伯父一家の人たちは、私にはまるで別の人種のようにみえたものである。生活水準も環境も、ずいぶんちがっていた。伯父の家へ行くといっても、そんなに気軽な気もちにはなれない。母に言われるまでもなく、私はお手伝いさんになるつもりで、伯父の邸にはいったのである。

――亡国の風潮を叱る。

――経営者の軟体動物化を憂う。

雑誌社のそんな注文のタイトルで、伯父は気ままな放談をして、私はそれを筆記する。たしかに伯父の談話にはリズムがあった。だが、それをそのまま文章にして読み返すと、論旨があまりにも一本調子に思えた。原稿を取りにきた雑誌社の人に、そんな感想をもらすと、相手は、

「それでいいんです。堀さんのもち味がそうなんですから。なまじ屈折した言いまわしがあると、あの人らしくないじゃありませんか。うちはそれを狙ってるんですよ」

と言って、にやりと笑った。

からだがいくつあっても足りないような、そんな多忙な日々を送ってきたので、引退生活はさびしいのにちがいない。伯父はしずかな暮しにおびえていたのだ。

毒舌が冴えてきたというのは、「われ健在なり」と、世間にしらせたいために、ことさら型破りなスタイルで放言するせいだろう。

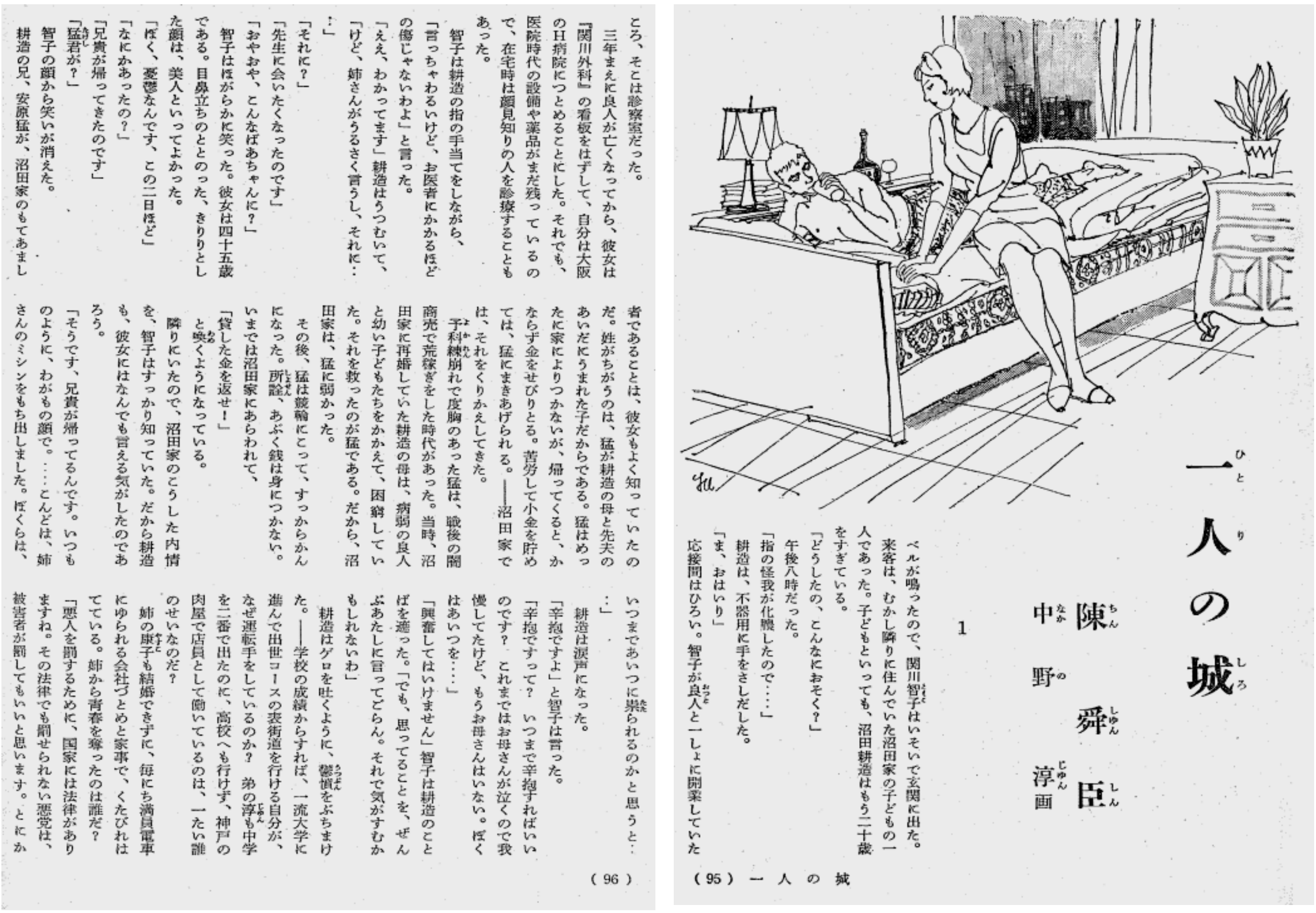
「これまで会社のために働いてきたけれど、これからは折り返しだ。わかるかね？　会社をひっくり返すと社会になる。わしは社会をよくするために余生を捧げたい」

それが伯父の口癖であった。

訪問客を歓迎するのも、さびしさをまぎらすためであろう。

「財界人だけじゃない。いろんな人間がわしのところへくる。全学連

誌面紹介（2）



一人の城

陳 舜臣
中野 淳 画

1

ベルが鳴ったので、関川智子はいそいで玄関に出た。

来客は、むかし隣りに住んでいた沼田家の子どもの一人であった。子どもといっても、沼田耕造はもう二十歳をすぎている。

「どうしたの、こんなにおそく？」

午後八時だった。

「指の怪我が化膿したので……」

耕造は、不器用に手をさしだした。

「ま、おはいり」

応接間はひろい。智子が良人と一しょに開業していたところ、そこは診察室だった。

三年まえに良人が亡くなってから、彼女は『関川外科』の看板をはずして、自分は大阪のH病院につとめることにした。それでも、医院時代の設備や薬品がまだ残っているので、在宅時は顔見知りの人を診療することもあった。

智子は耕造の指の手当てをしながら、

「言っちゃわるいけど、お医者にかかるほどの傷じゃないわよ」と言った。

「ええ、わかってます」耕造はうつむいて、「けど、姉さんがうるさく言うし、それに……」

「それに？」

「先生に会いたくなったのです」

「おやおや、こんなばあちゃんに？」

智子はほがらかに笑った。彼女は四十五歳である。目鼻立ちのととのった、きりりとした顔は、美人といってよかった。

「ぼく、憂鬱なんです、この二日ほど」

「なにかあったの？」

「兄貴が帰ってきたのです」

「猛君が？」

智子の顔から笑いが消えた。

耕造の兄、安原猛が、沼田家のもてあまし者であることは、彼女もよく知っていたのだ。姓がちがうのは、猛が耕造の母と先夫のあいだにうまれた子だからである。猛はめったに家によりつかないが、帰ってくると、かならず金をせびりとる。苦労して小金を貯めては、猛にまきあげられる。――沼田家では、それをくりかえしてきた。

予科練崩れで度胸のあった猛は、戦後の闇商売で荒稼ぎをした時代があった。当時、沼田家に再婚していた耕造の母は、病弱の良人と幼い子どもたちをかかえて、困窮していた。それを救ったのが猛である。だから、沼田家は、猛に弱かった。

その後、猛は競輪にこって、すっからかんになった。所詮、あぶく銭は身につかない。いまでは沼田家にあらわれて、

「貸した金を返せ！」

と喚くようになっている。

隣りにいたので、沼田家のこうした内情を、智子はすっかり知っていた。だから耕造も、彼女にはなんでも言える気がしたのであろう。

「そうです、兄貴が帰ってるんです。いつものように、わがもの顔で。……こんどは、姉さんのミシンをもち出しました。ぼくらは、いつまであいつに祟られるのかと思うと……」

耕造は涙声になった。

「辛抱ですよ」と智子は言った。

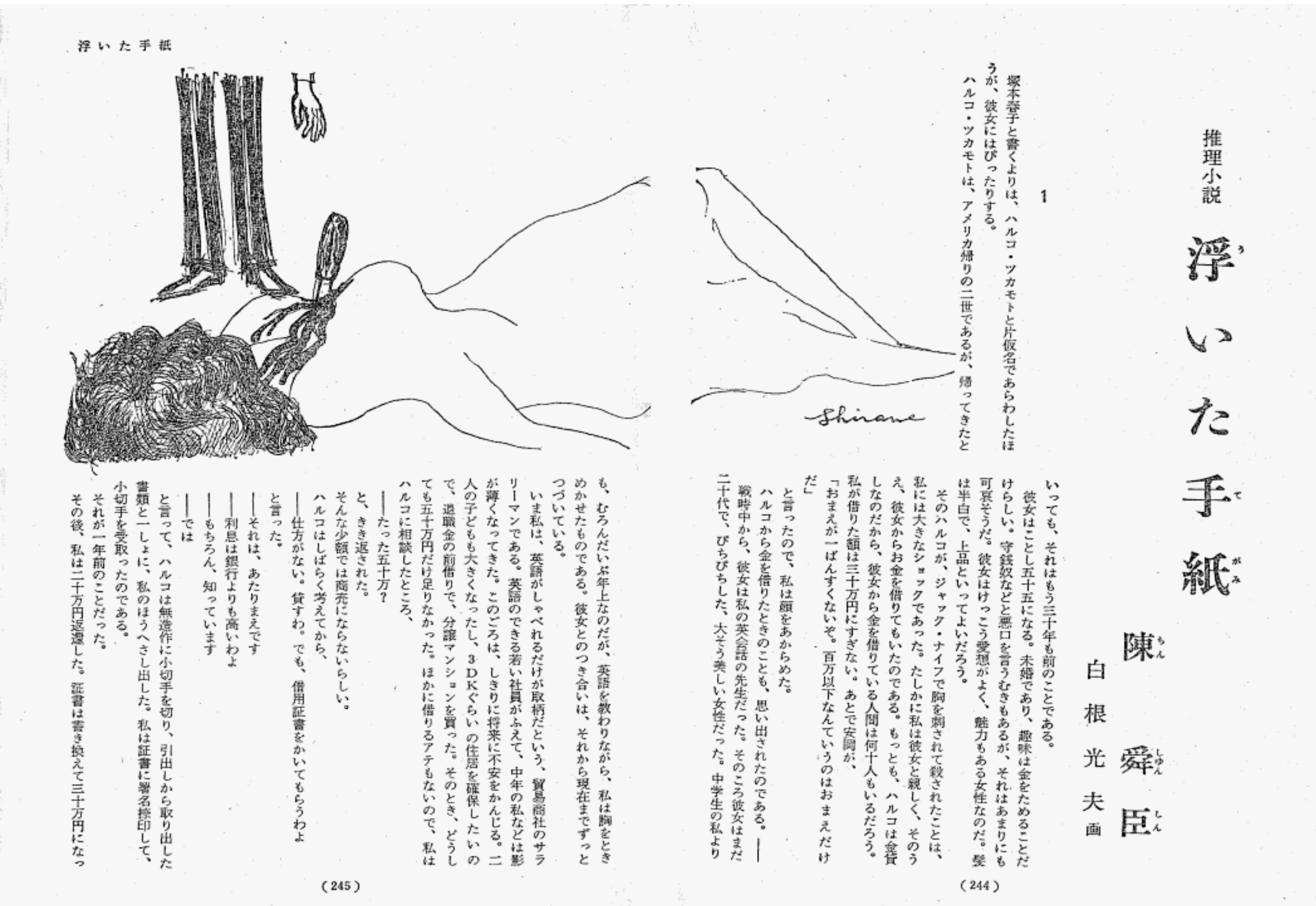
「辛抱ですって？ いつまで辛抱すればいいのです？ これまではお母さんが泣くので我慢してたけど、もうお母さんはいない。ぼくはあいつを……」

「興奮してはいけません」智子は耕造のことばを遮った。「でも、思ってることを、ぜんぶあたしに言ってごらん。それで気がすむかもしれないわ」

耕造はゲロを吐くように、鬱憤をぶちまけた。――学校の成績からすれば、一流大学に進んで出世コースの表街道を行ける自分が、なぜ運転手をしているのか？ 弟の淳も中学を二番で出たのに、高校へも行けず、神戸の肉屋で店員として働いているのは、一たい誰のせいなのだ？

姉の康子も結婚できずに、毎にち満員電車にゆられる会社づとめと家事で、くたびれはてている。姉から青春を奪ったのは誰だ？

「悪人を罰するために、国家には法律がありますね。その法律でも罰せられない悪党は、被害者が罰してもいいと思います。とにか



推理小説

浮いた手紙

陳 舜臣
白根光夫 画

1

塚本春子と書くよりは、ハルコ・ツカモトと片仮名であらわしたほうが、彼女にはぴったりする。

ハルコ・ツカモトは、アメリカ帰りの二世であるが、帰ってきたといっても、それはもう三十年も前のことである。

彼女はことし五十五になる。未婚であり、趣味は金をためることだけらしい。守銭奴などと悪口を言うむきもあるが、それはあまりにも可哀そうだ。彼女はけっこう愛想がよく、魅力もある女性なのだ。髪は半白で、上品といってよいだろう。

そのハルコが、ジャック・ナイフで胸を刺されて殺されたことは、私には大きなショックであった。たしかに私は彼女と親しく、そのうえ、彼女からお金を借りてもいたのである。もっとも、ハルコは金貸しなのだから、彼女から金を借りている人間は何十人もいるだろう。私が借りた額は三十万円にすぎない。あとで安岡が、

「おまえが一ばんすくないぞ。百万以下なんていうのはおまえだけだ」

と言ったので、私は顔をあからめた。

ハルコから金を借りたときのことも、思い出されたのである。――

戦時中から、彼女は私の英会話の先生だった。そのころ彼女はまだ二十代で、ぴちぴちした、大そう美しい女性だった。中学生の私よりも、むろんだいぶ年上なのだが、英語を教わりながら、私は胸をときめかせたものである。彼女とのつき合いは、それから現在までずっとつづいている。

いま私は、英語がしゃべれるだけが取柄だという、貿易商社のサラリーマンである。英語のできる若い社員がふえて、中年の私などは影が薄くなってきた。このごろは、しきりに将来に不安をかんじる。二人の子どもも大きくなったし、3DKぐらいの住居を確保したいので、退職金の前借りで、分譲マンションを買った。そのとき、どうしても五十万円だけ足りなかった。ほかに借りるアテもないので、私はハルコに相談したところ、

――たった五十万？

と、きき返された。

そんな少額では商売にならないらしい。

ハルコはしばらく考えてから、

――仕方がない。貸すわ。でも、借用証書をかいてもらうわよ

と言った。

――それは、あたりまえです

――利息は銀行よりも高いわよ

――もちろん、知っています

――では

と言って、ハルコは無造作に小切手を切り、引出しから取り出した書類と一しょに、私のほうへさし出した。私は証書に署名捺印して、小切手を受取ったのである。

それが一年前のことだった。

その後、私は二十万円返還した。証書は書き換えて三十万円になっ